＜講演＞

東亜同文書院呉羽分校

東亜同文書院大学 46 期・昭和 27 年愛知大学卒業　井上方弘

井上　ただいまご紹介にあずかりました井上です。こういう高いところでお話しするのは初めてですので、大変お聞き苦しい点が多々あると思いますが、最後までお付き合いのほど、よろしくお願いします。ちょっと腰を痛めてるので座らせていただきます。

東亜同文書院大学については先ほど馬場先生から詳細にお話がありましたので、そういう点は省略させていただきます。これから私の呉羽物語と、書院との絆についてお話しします。昭和 20 年4月、同文書院の最後の入学生である 46 期予科専門部は、上海組と呉羽組とに分かれたわけです。上海組は上海中学、上海商業、北京中学、それから満鉄の派遣員等によって、上海の本校へ直接入学した者です。戦争中、東シナ海は制海権、制空権ともにアメリカ軍に抑えられて渡航不能の状態でありました。従って渡航できなかったのはいわゆる呉羽組です。

1. 分校がなぜ呉羽の地に？

東亜同文書院大学の呉羽分校は、どうして富山県婦負郡呉羽村小竹（現富山市）に誕生したのでしょうか。呉羽紡績は昭和 19～20 年、呉羽航空機に変わっていまして、呉羽航空機では木製の戦闘機を作っておりました。伊藤忠兵衛社長が率いるダイケン産業グループの1つであった呉羽航空機は昭和 20 年当時、同文書院の大先輩である功力寅次さんが副社長でありました。画面の図にありますように三興、丸紅、大同貿易、伊藤忠等のグループは書院の先輩が多く、このような人脈によって呉羽分校は呉羽紡績の地に開校されたと思います。

2. ようやく開校

渡航待機中から昭和 20 年7月 25 日に至り斎伯守分校長（学長代理）他教職員 13 名と内地入学生予科専門部を含めて 177 名により、ようやく呉羽分校が開校されました。

「新入学生動員集合に関する注意」というこういうものが来たんですが、同期の者で持ってるのはただ1人で、これをお借りしたわけですけれども、初めのほうに昭和20年7月 25 日学徒動員ということで召集されたわけです。

呉羽駅から5分ぐらいのところに正門があって、元呉羽紡の膨大な敷地（約6万5千坪）は現在、富山市民芸術創造センター、桐朋学園大学の桐朋オーケストラ・アカデミー、それから富山県立呉羽高校の3つに区分されておりますが、正門を入って右手の3階建て事務所や、その他工場も 1920 年代ヨーロッパで流行したという直線を基調としたアール・デコ様式の建物でありました。それに比べて私達の入った寮は、元紡績工場の女工員が入っていた関係もありまして、木造2階建の非常に広いがややみすぼらしいお粗末な感じのものでした。1階に専門部生、2階に私達予科生が入りました。

その当時の印象に残っていることと言えば、2階の予科生のある部屋から下に寮雨とやらをして1階の専門部の学生から「コラーッ」と怒鳴られていたこと、それから青森の杉沢君なんかは津軽のズーズー弁で前庭の八角亭の縁で立ちながらいつも「東亜連盟」についての熱弁を振るっていたことなど。それから食糧事情が非常に悪くて、寮生の皆さんが近所の農家へ出かけてサツマイモや、その当時は秋には柿を分けていただいておりました。食堂の飯はサツマイモの

刻んだのや、あるいは芋のツルが入ったようなもので、並んで食べる時に盛りの良いものを取ろうと手を伸ばしておられた方の姿が今でも目に浮かびます。何しろ寮生活は戦時中、学徒動員体制下にあって、呉羽航空機工場では作業が中心で、授業がほとんど行なわれなかったように思います。工場の別棟には女子挺身隊の女子学生も動員されて来ていました。

3. 富山大空襲と救援活動

富山大空襲と救援活動について。昭和 20 年8月1日、B29 によって富山が襲われて爆弾・焼夷弾が雨霰の如く投下され、一夜にして富山市内は廃虚と化したわけですが、翌2日学生救援隊を組織し、呉羽山を越えて連隊橋（現在は富山大橋）を渡って市街地での救援活動に向かいました。神通川の川原には焼け焦げた死体が累々と重なり、何の気力もなくただ茫然と佇む人も見られ、焼けただれた赤ちゃんを背負い泣き乍ら歩き回っている若いお母さん、溝に逆さまに埋って死んでいる人、それはまさに生き地獄としか言いようがありませんでした。屍体の処理、焼跡の整理、食糧配給等の支援活動を行ないました。市内ではこの写真に見られるように大和デパートと北電本社の電気ビルがぽつんと残っていただけでした。新聞の記事によると空襲の被害状況は死者 2,705 人（この中には小生家内の実兄も含まれております）、負傷者 7,900 人、罹災者 109,592 人、罹災所帯数 24,914 戸となっております。

4. 先輩との出会い

小生の呉羽物語にどうしても欠くことのできない人物、それは 44 期の工藤先輩との出会いです。渡航不能で待機中、氷見駅（富山県氷見郡氷見町。現氷見市）へ出かけると、突然「君、書院生かね」と声をかけられました。それは私が被ってた登山帽に手製の「同文」と書いたバッジを付けていたのを見られたからです。工藤さんは御母堂さんと2人で氷見郡藪田村にあるご親戚の家へ疎開されていて、偶然にもその疎開先が私の中学時代の軍事教練指導官の小沢少尉のご自宅でした。工藤先輩のご好意により毎日のように小沢邸へ通って中国語の発声四声声調など書院カラス方式で特訓を受けました。その当時は今のような拼音法ではなく注音符号法でありました。「這是甚麽？」これは何ですか。「這是柿子」これは柿です。「這是白薯」これはサツマイモです。等々簡単な会話も習いました。工藤先輩からは大変厳しい指導を受けましたが、本当に一生忘れ得ない思い出であり感謝の念で一杯であります。先輩からは中国語の指導だけでなく、倉田百三の「出家とその弟子」、西田幾多郎の哲学書、三木清、長谷川如是閑、夏目漱石等、文学書や哲学書の読書の推薦も受けました。

5. 授業再開

終戦と同時に一応全員帰って待機しておりましたが、10 月 15 日に授業が再開されました。神谷龍男先生の国際法や、斎伯守先生の漢文、それから若江得行先生の英語などが頭に残ってますけれども、ほとんどは中国語の授業だったように思います。中国語の授業は池上貞一先生（後の愛知大学教授）、坂本一郎先生（後の神戸大学教授）で、このお2人が主に担当されていました。坂本先生の授業の時、突然紙袋からサツマイモを取り出されて「這是甚麽？」（現在は簡体字で「这是什么？」）と質問されたわけですけれども、発音と声調を中心に習ってきていましたから、いきなりの会話質問には全員がピンとこなかったのか、たまたま小生にとっては工藤先輩から特訓を受けた会話の1つで、手を挙げて「這是白薯」と答えたら、坂本先生からご褒美にサツマイモをいただきました。このことがあってから部屋では同僚から先輩扱いされて、いわゆる「書院がらす」の真似事をしたことが思い

出されます。授業の合間には坂本先生から「何日君再来」の中国語の歌の指導も受けました。

6. 寮大会のこと

10 月の下旬だったか 11 月に入ってからか記憶がありませんけれども、夜、寮大会が開催されました。大会の目的が何だったのかも明確じゃないんですが、懇親会の意味もあってか各県から代表で1人ずつ、歌でも話でもいいからやれとのことで、富山県代表で指名されて田舎の民謡を歌ったのを覚えています。その夜は外地から引き揚げられた方や、復員で帰られた先輩方が多数参加されておりまして、記録によると 240 名ということになっております。

書院の将来についての不安もあり、存続についても話がいろいろと議論されました。終戦後の混沌とした状況下で、同文書院の経営母体である東亜同文会は連合国側から厳しい批判の目にさらされ、先行き不透明で、経済的な困窮と食糧事情の悪化、加えて北陸の地での冬越しに備えての燃料不足等々難問題が山積みで、結局 11 月 15 日に授業打ち切りとなった次第です。存続への情熱は学生以上に斎伯守先生やその他教職員の方が東奔西走されたということを、後日知ることになりました。

7. 46期呉羽大会のこと

46 期の呉羽大会のことですが、この新聞は北日本新聞に前日掲載されたものです。平成3年6月 15 日、46 年ぶりに、呉羽分校のあった呉羽の地で 46 期生の総会を小生が幹事役で行ないました。46 期 31 名と滬友会（同文書院の同窓会の名前）本部副会長の大串先輩（32 期）、それから池上先生等特別参加者9名、計 40 名で懐かしく楽しいひとときを送りました。

当日まず呉羽分校のあった呉羽紡（その当時は東洋紡の呉羽工場に名前が変わっていました）へ出かけ、昔のままに残った正門と、右手の3階建て事務所、寮から食堂、工場へ行く廊下、その前にある藤棚を眺め、また前庭の八角亭もそのままにあり、廊下の通り側を歩いて食堂の鉄筋吹き抜け風の建物も、またその奥にあった大きな鉄鍋もそのままになっており、呉羽組の連中は昔懐かしそうにその前に立って 46 年前のことを思い出していました。木造の寮はすでに取り壊されていましたが礎石がはっきりと分かり、それを踏みしめ、昔寮から眺めた大木がすくすくと伸びて、46 年前のわれわれ青年を迎えてくれているようで嬉しく思った次第です。

翌 16 日は大串先輩夫妻を始め一同は宇奈月からトロッコ電車で黒部渓谷へ出かけました。参加者からはこの企画も大変喜ばれました。特に1年先輩の 45 期の殿岡先輩が翌年亡くなられたので、殿岡令夫人にとって最後の思い出の旅であったと、その後も何度もお礼を言われました。殿岡令夫人は本間学長のご令嬢で、本日もこの会場にお見えになっております。

8. 北陸滬友会の絆

滬友会は富山・石川・福井と各県で支部を持っていましたけれども、人数の減少によって滬友会北陸支部と云うことで3県を一体化し、持ち回りで会合を開催してきました。支部長は今日これから講演されます先輩の宮田一郎さんです。滬友会の本部組織も高齢化で全国的に正式解散となりましたが、北陸支部はその後も北陸滬友会として、3県持ち回りで交流を図り、又中国へもたびたび出かけ、交流を図り、絆を深めてまいりました。

この写真は交通大学ですが、これは本来私達呉羽組が渡航していれば、上海組と同時にこの門をくぐって入学していたわけです。これは図書館で、現在も残っています。これは学部寮の前で、ここに「飲水思源」の文字が刻まれております。

9. 宮田一郎先生と富山・中国ネットワーク

「富山・中国ネットワーク」と宮田一郎先生についてちょっと触れておきます。富山・中国ネットワークは有志で作った団体ですが、活動の一環として1泊2日の中国語学習会を開催し、宮田先生にご依頼して快く引き受けていただいて、当初の計画通り10年間連続して1泊2日の学習交流会ができました。小生も実行委員長として、宮田先生に福井からわざわざ来ていただいて、本当に感謝し、書院の絆の深さを感じました。ネットワークは現在も1日研修で続けており、春節交流会、それから中国の朋友と話そうとか、花見の会とか、いろいろ交流を続けています。

10. 呉羽分校から愛知大学へ

呉羽分校から愛知大学へ転入学した1人として、愛知大学が豊橋の地に設立となった経緯についてお話しします。昭和21年3月に引き揚げ帰国された本間先生は、連合国総司令軍の動向や引き揚げ学生の編入状況を調べ、京城帝大の大内武次先生や同文書院の小岩井淨先生その他の方々と、自力による新設大学の創設を計画されました。候補地の中から諸条件を検討し、地元豊橋市長の積極的・全面的な支援もあって豊橋に設立となりました。豊橋の陸軍予備士官学校の跡地に早期開学をめざして具体的活動を始められたわけです。豊橋の情報は神谷龍男先生のご努力で、その他に呉羽組46期予科同期の豊橋出身者であった大野一石君の情報提供もあったと聞いております。

本間先生は、「引き揚げ学生に対する世間の関心と同情は書院という背景があったからであり、だからこそ大学設立計画に対し支援・応援がいただけたもので、書院と無関係ではとても学校はできなかっただろう」と語られています。21年の夏頃でしたか本間先生の名前で転入学の通知を受けました。その当時の転入学生は書院生を始め朝鮮の京城帝大、台湾の台北帝大、建国大学ハルビン学院等、外地にあった学校はほとんど網羅され、その他に早稲田、慶応、ナンバースクール、陸士、海兵等、約80校から転入学されたという記録があります。

開学2年目の入学式の時に林毅陸初代学長が訓示の中で「愛知大学の愛知は単なる地縁によるものではない」と。「古代ギリシャの哲人達が「哲学」のことをそう言ったように愛知、フィロソフィアを求める大学、ということを心に刻んでもらいたい」と呼びかけられたのは鮮明に残っております。それから創設者である本間学長のお言葉も忘れることはできません。「敷石になるような物質的資金があって安易に建てられたものではなく、存在したものはただ知を愛するという無形ではあるが熱烈な真理探究心であった。その無形の絆で糾合された同志が相集まって設立されたのが愛知大学である。教室は雨露を凌ぐに足ればいい。机が足りなければそれも我慢しよう。真理探究に手を取り合って進むべき教師と学生さえあれば、学校はできる。否、作ってみせる」と語られ、高邁な精神が感じられ、忘れてはならないと強く思っている次第です。

これは開校1周年記念に最高裁判所長官三淵忠彦さんが見えて、「任重く道遠し」。論語の泰伯第八番に載ってるお言葉です。

11. 愛大同窓会の絆

愛知大学の同窓会の絆として、富山支部は例年8月の下旬に薬師岳の登山口にある折立の「十三重の塔」に参拝して同窓の絆を深めてきております。十三重の塔は皆さんもご存じだろうと思いますが、三八豪雪の時に薬師岳で遭難した愛知大学山岳部13名の方々を祀った慰霊碑であります。この当時の森田支部長を始め同窓の方々、それから富山県警の方々、地元の関係者の方々から大変なご協力・ご支援をいただいたわけであります。この遭難事故を契機にして富山県警山岳警備隊が全国で初めて結成されたと聞いております。

12. 寮歌祭のことなど

小生の呉羽物語の続きとして寮歌祭に触れておきます。呉羽での生活は僅か 50 日間でしたが、小生にとって書院生の絆を深く感じ、全国寮歌祭、神戸寮歌祭、仙台寮歌祭、豊橋寮歌祭等に参加させていただき、多くの先輩・同僚との交流を通じ青春の情熱を燃やして歌い、さらに絆を深めてきました。神戸寮歌祭の時はわざわざ中国から 44 期の王宏さんが見えて、中国人のこの方とも交流ができました。

これは豊橋であった愛大の寮歌祭の時に逍遥歌「月影砕くる」の碑が建てられ、昔の翠嵐寮の前での除幕式に参加した時の写真です。

なお平成 14 年 12 月 25 日に 44 期四四会全国大会が、小生の生まれた氷見の「国民年金保養センター氷見」で開催された時、富山大学名誉教授である楠瀬勝先輩から手伝いを依頼され、全国から参加された 52 名の先輩方との懇親会や、翌日高岡の国宝瑞龍寺、五箇山、白川郷等の世界遺産の見学を通じて交流ができ、あらためて書院の絆の深さを噛みしめました。右側で旗を持ってるのは私です。この時沖縄から来られた芥川賞作家の大城立裕先輩と、元毎日新聞論説委員の江頭数馬先輩からそれぞれ自作を贈られ本当に感動したのを覚えています。

すでに鬼籍に入られた諸先生、先輩方、同僚の方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、中国との草の根交流に微力を尽くしていきたいと思っております。また愛知大学が書院から引き継がれた国際性と地域貢献の建学の精神を生かし、ますます発展していくことを信じております。

最後に小生の好きなサミュエル・ウルマンの「青春の詩」の一節を皆様にお贈りいたします。「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。」

本日は本当にどうもありがとうございました。

司会　井上先生ありがとうございました。僅か 50 日しか存在しなかった呉羽分校についての貴重なお話をしていただきました。せっかくですので井上先生の今のお話に関しまして、これを聞いておきたいとか、そういったご質問等ございましたらお受けしたいと思います。はいどうぞ。

質問者　現在上海交通大学のある場所というのは、東亜同文書院が建てたんですか。借りていたわけですか。

司会　ちょっと私が代わりにお答えいたします。建物は元々上海交通大学の建物でありまして、第二次上海事変が起きたあと、交通大学の当時の学生は避難するんですね。そして上海の一般市民がそこに入っている。日本がそれを管理していたのを、外務省を通じて日本のあいだで借りるという形になってました。今上海交通大学の校史を書いている方達は、「これは自分達と無関係に日本側が借りたんだ」という立場をとっております。従ってあの建物は東亜同文書院が作ったんじゃなくて、上海交通大学が戦争中避難した後、借りたという形になっております。よろしいでしょうか。

質問者　分かりました。

司会　ではあともう一方。はい。お名前とご所属も合わせてお願いします。

質問者　私は昨日新聞を見て参加したんですけれども、先ほどの話の説明でちょっとはっきりしなかったんですが、愛知大学というのはいわゆる旧制大学に入るんですか。それとも新制大学に入るんですか。

井上　旧制です。私は愛知大学の予科1年に転入学して、予科3年・学部3年と豊橋で過ごしました。全国でも旧制大学最後の大学であります。

司会　よろしいでしょうか。どうしてもという方が見えたらお受けしたいと思いますが。挙手が無いようですので、井上方弘先生のご講演は以上

とさせていただきます。井上先生ありがとうございました。

休憩時間のあいだにDVDを上映いたしましたが、こちらの DVD は受付のほうで、残部数は少ないですが無料配布をしておりますので、もし興味のある方が見えましたらお帰りの際にお持ち帰りください。それから1点また追加でご連絡なんですが、こちらの隣の会場で明日も資料展示会をやっております。明日は午前 11 時・午後2時・午後4時の3回、資料展示説明会を行ないますので、もしまた皆さんお時間ございましたらぜひともご参加くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

では続きまして宮田一郎先生に「東亜同文書院の中国語教育と私」という題でご講演いただきます。宮田先生のプロフィールを簡単にご紹介しますと、1923 年福井県のお生まれ。1940 年東亜同文書院大学に福井県費生として入学され、在学中に学徒出陣で出征されました。戦後中国語を研究され、多年にわたり福井大学で中国語教育を担当されました。1969 年に大阪市立大学に招聘され、講師、助教授を経て 1976 年教授に就任されました。この間 NHK テレビ「中国語講座」を6年間務められました。1985 年以降は大東文化大学、京都外国語大学、北陸大学等の教授を歴任され、その間 NHK ラジオ中国語講座上海語を2年間担当されました。ご著書は「中国新故事集」を始めとして数多くございますが、近年は「漢語方言大辞典」など、宮田先生と中国上海の復旦大学との共同編集による辞典が中国で出版されております。現在はご自身の中国語研究 70 年を総括する『海上花列伝』を執筆中と伺っております。では宮田先生にご講演をお願いしたいと思います。先生よろしくお願いいたします。